

令和紙



おりおりの記

炎上した愛車スバル

岡三証券グループ
取締役社長

新芝 宏之

高速道路で車を全焼させた経験のある方は少ないのではないかと。30年以上遡るハーバード行政大学院の卒業旅行。総点検したはずの水色のステーションワゴンを駆って、ボストンからメイン州、そしてケベック州のオルレアン島、モントリオール、ナイアガラの滝へと数百キロを連日走った。道路地図を頼りにロードサイドのホテルを探しながらの気ままな旅行のはずだった。突然ダッシュボードから煙がもくもく上がってきた。高速道路だったが緊急停止。助手席の家内に「逃げよう！」と車外へ飛び出した。道路上は大騒ぎで、見知らぬ人達が助けてくれた。発煙筒を並べてくれる人もいた。スポーツカーから颯爽と降りてきた紳士は「危ないから下がっていなさい」と消火器を持って独り車に近づいていった。煙は収まらない。黒煙に代わり、大きな火柱が上がり始めた。爆発するのかもしれない。燃え上がる中、そこに現れたのはカナダ版JAF。髭面でツナギ服を着た大男が数人。迷いなく燃える車に近づいて行って手際よく荷物を助け出してくれた。幸い怪我人もいなかった。国境を越えて「人々」の優しさを大いに感じた経験だ。

しばらく日本を離れたことで、「国」を意識するようになった。生まれる国を自分で選択できるわけではない。「親ガチャ」ならぬ「国ガチャ」。昨今の北朝鮮、香港、新疆、ミャンマー等々のテレビ報道を観ながら、日本で良かったと思うよりも、何もできない無力感を強く感じる。「国」と



▲1990年、ナイアガラの滝にて

いう枠組みを超えることは難しい。

一方、経済ではどうだ。「企業」はグローバル化し、国を超えた経済の連関は強まるばかりだ。一つの起点は1980年代のサッチャリズム、レーガノミクス。そして続く1989年のベルリンの壁崩壊に象徴される冷戦終結だろう。この時の高揚感。資本主義、民主主義が勝利したと思った瞬間だ。しかしながら、今やグローバル化の副作用でもある格差、分断によって、我々は単に勝利したのではないという失望感に苛まれている。

それでも「地球」は一つだ。気候変動に対処できなければ人類は存続すらできない。サステナビリティは企業経営、投資・金融にとっても不可欠な評価軸であり、対応できなければ淘汰しかない。ただ、蛇足かもしれないが、国や企業は純粋な貢献に加えて、新しいルールで如何に自らが果実を得るのかという視点も見落してはならないと感じている。